

認知症高齢者支援におけるソーシャルワーカーが直面する困難性とその対処 —地域包括支援センターの社会福祉士に焦点をあてた質的分析—

○ 桜美林大学 氏名 久松 信夫 (会員番号 4610)

キーワード：認知症高齢者、ソーシャルワーカーの困難性と対処、地域包括支援センター

1. 研究目的

在宅の認知症高齢者をめぐるソーシャルワーク支援の際には、地域包括支援センターのソーシャルワーカーに葛藤や困惑、限界感、苦慮などの困難性が生じ、過大なストレスを生じさせることが多い。その背景には、認知症高齢者が呈する“認知症”特有の症状や、認知機能・記憶力や理解力・判断力の低下が基盤にある生活支障などから派生することが挙げられる。

そこで、本研究の目的を次の二点とした。第一に在宅認知症高齢者の支援をめぐる地域包括支援センターのソーシャルワーカーが日常の支援活動において、直面する困難性にはどのような内容から構成されているのか、その実態を明らかにすることである。第二に、その明らかにされた困難性に対して、どのような対処を行っているのか、その行為の概念生成を行うことである。

2. 研究の視点および方法

調査協力者は、地域包括支援センターのソーシャルワーカー（社会福祉士）であり、①社会福祉士取得後、(在宅介護支援センターを含む)地域包括支援センターにおいてソーシャルワーカーの経験が5年以上ある者、②現在地域包括支援センターで社会福祉士としてソーシャルワーク業務を行っている者、または、社会福祉士を取得し主任ケアマネジャー（主任介護支援専門員）の職種でソーシャルワーク業務を行っている者であり、このいずれの条件をも満たす者を調査協力者の対象とした。

調査は、2010年10月～2011年5月の期間に実施し、上記①と②いずれの条件をも満たす者をスノーボールサンプリング法を用いて調査協力者を抽出した。データの収集は、半構造化面接によるインタビューにて実施した。インタビューガイドは以下の4点である。①「認知症高齢者の支援をめぐるどのような困難性を経験し、それに対してどのように対処してきたか」。②「認知症高齢者の支援をめぐる悩みや困難性に対処しているときの、あなたの気持ちと、対象者(認知症高齢者)に対して、どのような気持ちをもっているか」。③「認知症高齢者の支援をめぐる悩みや困難性に対処する過程で、阻害となっているものや影響を受けていたことは何か。また、対処を促進させるようなことにはどのようなものがあつたか。」④「認知症高齢者に対する相談支援活動の悩みや困難性に対処するために必要なものは何か。また、それはどうしてか。」。

分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて行ったが、その際の分

析テーマは「在宅の認知症高齢者を支援するソーシャルワーカーの困難性およびそのプロセス」であり、分析焦点者は「認知症高齢者をめぐる相談支援を担当している地域包括支援センターのソーシャルワーカー」とした。

3. 倫理的配慮

調査協力者には、研究目的・方法、インタビュー内容、調査協力は任意であり断っても調査協力者には不利益が生じないこと、プライバシーが保たれる場所でインタビューをすること、得られた口頭データは研究発表の目的以外には使用しないこと、学会報告や論文作成の許可とその際に調査協力者名等個人名は匿名にする、個人情報保護等を記載した協力依頼文書を事前に渡し、許可・同意を得た。実際のデータ収集であるインタビュー時にも再度、文書と口頭で説明し、調査協力への同意書に相互に署名した。なお、東洋大学大学院の研究等倫理委員会の審査を受け承認を得ている。

4. 研究結果

調査は18名のソーシャルワーカー（社会福祉士）にインタビューを実施した。男性6名、女性12名、平均年齢46.4歳、調査時までのソーシャルワーカー実務経験は平均約12年であった。インタビュー時間は合計約22時間、逐語記録はA4版で252枚である。

認知症高齢者支援をめぐる地域包括支援センターのソーシャルワーカーが直面する困難性は、9個の概念が生成され、それらは3つのカテゴリーに収斂することができた（以下、概念を【 】, カテゴリーを< >で表す）。すなわち、<認知症特有の症状への困惑>に収斂できた【拒否への戸惑い】【決定できない葛藤】【理解不足への困惑】【非連携への困惑】、<実践を制限させる足かせ>に収斂できた【対象者制限への苦慮】【支援時間への苦慮】、<対応方法への迷い>に収斂できた【一側面からの分析】【支援行動への躊躇】【応えられない無力感】である。これらの困難性に対するソーシャルワーカーの対処行為は、13個の概念と4つのカテゴリーに分けられた。すなわち、<支援関係展望化>に収斂できた【特異な信頼関係構築化】【状況の変化を待つ】【支援可能性拡大】、<相手中心の志向>に収斂できた【知識理解の蓄積促進】【願い続ける】【意向の想像化】、<活動基盤安定化>に収斂できた【客観視する力の強化】【多面的情報分析】【安定した支援条件設定】、<チーム力強化>に収斂できた【役割周知】【専門職が集まる場づくり】【適切ケアに向けた伝達】【チーム力活用】である。

5. 考察

困難性への対処カテゴリーには中心となる4つのコア概念があり、そのコア概念におけるソーシャルワーク実践の背景を検討すると、ソーシャルワーカーはアウトリーチ視点に基づく実践を通し、個々のソーシャルワーカーの認知症観/人間観に支えられ、その後の実践の展開における実践環境を整えるという、対処行為が描けるものと考えられた。同時に、これらの実践を行う条件として他職種とのチームアプローチが前提であることが考察できた。